会誌の想いで

中林誠一郎

電気化学会誌（現 *Electrochemistry* 誌）を初めて手にしたのは、21歳の梅雨時でありました。当時、私は、大学の3年生で、大学の講義になじめず、しばしば下宿で、急がぬ毎日を暮らしていたのでした。怠惰な毎日でしたが、かといって、話にならない阿呆というわけでもない、いささかうぬぼれてもいて、時に、気に入った本など図書館から借りて勉強もすることもありました。しかし、所詮、若輩者の悲しさ、あちらこちらの本を漁ってみても、判らないものはどうにも判らない。こんな煮詰まり鬱屈した雨の日、近くの本屋を覗いてみると、「電気化学および工業物理化学会誌」というのが、書架に置いてありました。これが、風に聞く「学会誌」と言うものかと、当時、電気化学と名の付く学科の学生だったこともあって、この本がさっぱりわからなければ、いっそ思い切りも着くような気がして、大枚千五百円近くを出して、それを購入したのでした。

下宿に帰って、こわごわ眺めてみると、ところどころ判るような気がするところもあり、いっそ思い切りよくさっぱり判らない方が良かったなどと、天をも恐れぬ雑言を吐き、いささか拍子抜けする想いもありました。しかし、当時、つまらぬ毎日を暮らしていた甘えた気持ちの何処かには、この事に、励まされ、背中を押してもらえたような、妙な安心感も少しは芽生えて、その後、あちらこちらと迷いながらも、不思議なご縁で、偉大な先生方や親身な先輩諸氏に恵まれ、ようやくと今のように、研究で飯の頂けるありがたい身分にはなれたのでした。

「*Electrochemistry*」誌は、近々、電子化され、創刊以来の全巻を、ネット越しに見ることができる予定と聞きます。自分としては、感慨深い、あの号に、いったいほんとの所は、どんなことが書かれていたのか、是非見てみたいと思います。学会誌は、多くの場合、研究のプロのためにあるようにも思われていますが、時として、若輩者が自ら身をかえりみて、なんだか訳のわからぬ努力を始めるきっかけにもなり得ることを、「初心忘るべからず」と、自らの戒めのためもある、書かせて頂いた次第です。

Seiichiro NAKABAYASHI
平成 14, 15 年度編集理事
埼玉大学理学部教授